

新しいリハビリテーション

「夫のためにみそ汁を作りたい」、「ひ孫に勉強を教えたい」、「元校長として式典に出席する」、「簡単なおかずを自分でつくる」、「再び山へ登りたい」。これらは新しいリハビリテーションの考えを取り入れた論文のタイトルの一部です。論文のタイトルなのに、いぶん身近なテーマだと思いませんか。この新しいリハビリテーションは生活行為向上マネジメントと云います。患者さんにとって大切な生活行為をリハビリテーションの目標とするのが、生活行為向上マネジメントの特徴です。目標の設定にあたって、患者さん、家族、医療スタッフでの連携が図られるので、患者さんの願いが反映され、かつ、合理的な目標が設

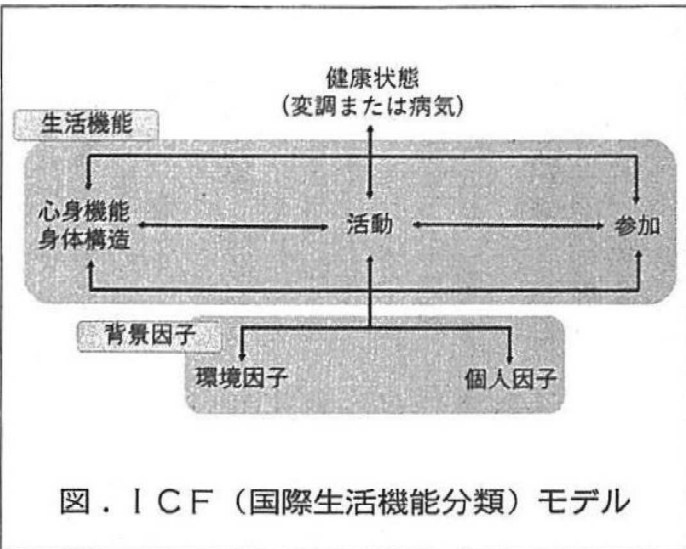


<21>

埼玉県立大学准教授 松尾 彰久

定されます。

さて、生活行為向上マネジメントではICF（国際生活機能分類）を人の全体像を把握するために活用します。ICFは2001年にWHO（世界保健機関）総会で採択されました。図をご参照ください。ICFでは生活機能を中心として、健康状態、生活機能、背景因子の相互作用として人間を捉えます。生活機



人とのつながりが「生きがい」に

能は「心身機能・身体構造」、「活動」、「参加」の3つがあります。「心身機能・身体構造」とは心や体の働きと身体の構造を示し、例えば手足の動き、心臓の構造から精神的な機能まで含まれます。「活動」と「参加」は家庭生活、社会生活などが含まれています。生活行為向上マネジメントでは、「活動」と「参加」の目標達成に重点が置かれています。

最近語られている長寿の秘訣として、具体的な目標を持つ、人とのつながりを持つ、役割を持つことなどが言われています。いずれも、ICFでいえば「活動」と「参加」に関係がある事柄といえるでしょう。

人とのつながりから役割や生きがいが生まれ、健康につながっていきます。家族、地域社会、趣味、スポーツを見直し、自分自身にとって大切な生活行為を一つ発見することとは、あなたの健康づくりに役立つ大事なヒントを与えてくれるはずです。